

アジア諸国における観光に関する研究

東 美晴
根橋正一
呉 軍

私たちは、2003年度より3年間の計画で科学研究費を得て「グローバル化時代のアジア諸国の観光に関する包括的研究（研究代表：根橋正一，研究分担者：米田和史・八田正信・東美晴・朱思琳・呉軍）」を課題とする研究に取り組んでいる。初年度である2003年度には5回にわたる現地調査を行った。すなわち，韓国，スリランカ，ベトナム，中国そして長崎である。

またこの間にメンバーはいくつかの成果を発表してきたが，本号には1本の論文と研究ノート2本を投稿する。

東美晴は，昨年度「東アジアにおける観光とグローバリゼーション—台湾の日式温泉の事例—」「山岳観光の社会史—立山・黒部アルペンルートの旅を通して—」（『社会学部論叢』）「東アジアにおける観光とグローバリゼーション—越境する大衆文化に着目して—」（社会学部研究会報告），「現代中国における観光の意味—意識変容を鏡として」（日中社会学会報告）などを発表してきた。観光人類学を基礎としながらアーリなどの観光社会学の成果をフォローすることによってあらたな観光研究の視点を提案し，それに沿って日本についてばかりでなくアジア各国の観光についてユニークな論考を発表している。今回投稿の論文もその延長上にある。

呉軍は，商業論をベースにして，市場や小売業界，特に野菜の流通をテーマにして研究を進めているが，本研究プロジェクトではアジア各地における市場・商店街の社会的機能としての観光に着目して調査研究に参加している。韓国大邱市の薬令市を題材にして，その観光化に関する調査の成果を投稿する。なお，中国において昆明の花卉市場に注目して調査をおこない，さらに2004年度にも再度調査を計画しており，市場や商店街と観光に関するユニークな研究を蓄積しつつある。

根橋は本研究において，世界経済と国際観光に関する基礎的な視点として，経済的側面に焦点を当てて研究しており，昨年度は「アジア諸国の国際観光社会学—ヨーロッパ<世界経済>と国際観光—」（『社会学部論叢』）を発表したが，今号はその延長線上で長崎を中心にした論考である。